

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00647

研究課題名(和文) 日本語の先端的な動向と日本語母語話者の誤用問題に関する通時的研究

研究課題名(英文) Diachronic research on cutting-edge trends in the Japanese language and its misuse by native Japanese speakers

研究代表者

浅川 哲也 (ASAKAWA, Tetsuya)

東京都立大学・人文科学研究科・教授

研究者番号：50433173

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本語母語話者にみられる誤用問題を日本語の先端的な変化として捉えた。現代日本語の先端的な変化を示す具体例を多数抽出し、その動向について分析した。公開型コーパスや、インターネット上の言説、刊行物の書き言葉など各種資料を調査対象として調査した。誤用でよく知られる「ら抜き言葉」のほかに、「ら抜き言葉」がさらに進化した変化である「れ不足言葉」・「れれる言葉」・「ら入れ言葉」の使用実態について明らかにした。また、「形容詞 い不足言葉」など、これまでに言及されていない形態変化についても調査し、その使用実態を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、日本語母語話者の誤用問題と、現代日本語の先端的な動向の問題とを日本語の通時論として結びつけることが可能となり、日本語学にあらたな研究分野を開拓するという学術的意義を得ることができた。「ら抜き言葉」はこれまで多くの日本語学研究者によって“五段活用動詞から派生した可能動詞が他の活用の動詞に拡大したもので可能表現に特化した日本語の合理的な変化である”として評価されていた感があるが、本研究では、「ら抜き言葉」は日本語の動詞・助動詞が工段型の活用と同化されていく現象のごく一部でしかなく、母語話者の御用問題が日本語文法の根底的変化の証左であることを明らかにしたという点で社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：We viewed the problem of misuse by native Japanese speakers as a cutting-edge change in the Japanese language. We extracted many specific examples of cutting-edge changes in modern Japanese and analyzed their trends. We investigated open corpora, Internet discourse, and written language in publications. We clarified the actual usage of ``retasu words`` ``rereru words`` and ``raire words`` which are further changes from ``ra-nuki words``. We also investigated morphological changes that have not been mentioned before, such as ``adjectives (itasu words),`` and clarified their usage.

研究分野：日本語学

キーワード：ら抜き言葉 れ不足言葉 れれる言葉 ら入れ言葉 形容詞 い不足言葉 です

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

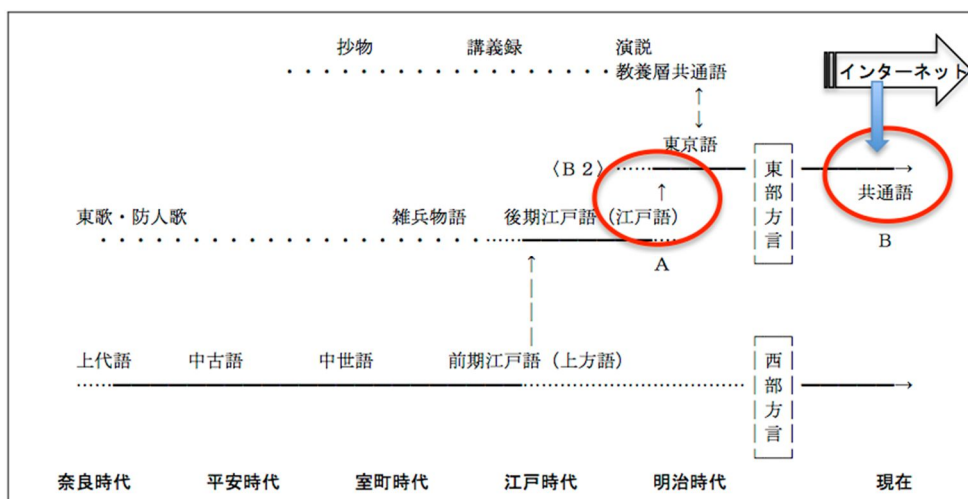
1. 研究開始当初の背景

日本語母語話者の「誤用」として採りあげられる問題としては、ら抜き言葉などがその代表的な例である。ら抜き言葉はこれまで多くの日本語学研究者によって「五段活用動詞から派生した可能動詞が他の活用の動詞に拡大したもので可能表現に特化した日本語の合理的な変化である」として積極的に評価されてきた。しかし、近年になって、インターネット上の言説や刊行物の書き言葉の中に、ら抜き言葉のより進行した形態変化であるとみられる **れれる言葉** や **ら入れ言葉** など、現代日本語の先端的な動向を示す例が多数観察されるようになった。本研究は **れれる言葉** **ら入れ言葉** など現代日本語の先端的な動向を文献によって捉え、現代日本語にいま起きている母語話者による誤用現象を体系づけ、それを共通語の前身である後期江戸語の言語の実態と比較しつつ、日本語の言語史の中に位置づけようとするものである。

2. 研究の目的

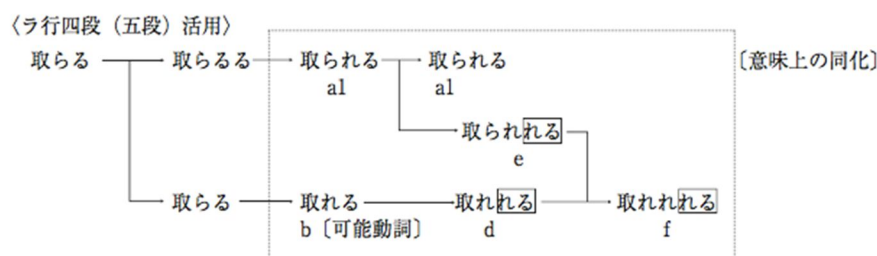
本研究は、日本語母語話者の「誤用」問題について、インターネット上および刊行物の書き言葉に観察される、可能の意味とは異なる用法で用いられるら抜き言葉や、その変種である **れれる言葉** **ら入れ言葉** などの用例を抽出してその実態について検討することを第一の目的とするものである。

本研究の第二の目的は、現代日本語の共通語の基盤のひとつであった後期江戸語の武家・上層町人層における話し言葉（【図1】の丸A）について、江戸時代末期人情本を資料としてその実態を明らかにし、これを共通語の正用のモデルのひとつとみなして、現代日本語の先端的な動向（【図1】の丸B）と文法項目別に比較対照し、現代日本語の先端的な動向が日本語の言語変化の歴史の中でどのように位置づけられるのかを解明するところにある。



【図1 日本言語史における現代日本語の位置づけ】

【図1】にある丸Aと丸Bの具体的な事例のひとつを【図2】によって示した。本研究の学術的独自性と創造性は、過去の多くの日本語学研究者たちによって主張されて



【図2 丸A・丸Bにおける形態変化の経緯】

きた「五段活用動詞から派生した可能動詞が他の活用の動詞に拡大したもので可能表現に特化した日本語の合理的な変化である」という説を本研究では真っ向から問い直し、現代日本語の先端的な動向と日本語母語話者の誤用問題について検討するところに研究目的がある。

3. 研究の方法

(1) 現代日本語の先端的な動向についての実態調査を、『現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言 (BCCWJ-NT)』・『国会会議録検索システム』・『国語研日本語ウェブコーパス (NWJC)』のほか、インターネット上で公開されている各種のコーパスを用いて、**れれる言葉** **ら入れ言葉** など、現代日本語の先端的な動向をはかる誤用表現の用例を抽出し、コーパスごとに用例の実在性および信頼性をその典拠に遡及して確保する基礎作業を行う。

(2) 現代日本語の先端的な動向に対する通時的な比較対象として、後期江戸語の上層町人による会話文から成る江戸時代末期人情本を採りあげ、全文の正確なテキストデータと人情本コーパスとを作成する。本研究で全文のテキストデータ化を行う人情本は以下のとおりである(：の左項は著者)。

(3) 後期江戸語から現代日本語、そして近未来に予想されうる日本語の姿までを通時的な観点によって日本語史として記述する。

4. 研究成果

(1) 日本語の先端的な変化の動向のひとつとして、助動詞「れる・られる」の接続と意味用法の変種である **ら入れ言葉** を採りあげ、国会会議録データベースを用いた調査と分析を行った。

ら入れ言葉 について、『国会会議録』を資料として調査したところ、昭和22年(1947年)の第1回国会の時期から **ら入れ言葉** が使用されていることが確認された。また、『国会会議録』の **ら入れ言葉** はすべての動詞の活用の種類にその例があり、受身・可能・尊敬の意味用法で使用されていることが明らかになった。『国会会議録』では、1950年代の **ら入れ言葉** の使用数が最も多い。1950年代の五段活用動詞の **ら入れ言葉** が、改まった場面における規範的なア段型未然形への助動詞「れる・られる」の過剰な接続ではないかとみられるのに対し、2000年代の **ら入れ言葉** は工段型未然形への助動詞「れる・られる」の過剰な接続であるという傾向がみられる。

(2) 日本語の先端的な変化の動向のひとつとして、「ら抜き言葉」と日本語教育の分野との関連から分析と考察を行った。「見る・出る・来る」を可能表現にすると、「見る・出る」では、助動詞「られる」を接続させる正用よりも、「見れる・出れる」というら抜き言葉の使用者の方が日本語母語話者では優勢であり、また、「来れる」は正用に対してほぼ拮抗している。日本語母語話者における「ら抜き言葉」の浸透は深刻なものである。日本語を学習する日本語非母語話者が、自国内の日本語教育機関で規範的な日本語を学習した後に日本国内に留学すると、日本国内の日本語母語話者が日常的に頻用する「ら抜き言葉」に遭遇して、これに当惑したという経験談は、よく耳にするところである。本研究では、日本語教育の観点から、日本語母語話者のら抜き言葉をどのように捉えるべきか、また、ら抜き言葉とどのように向き合うべきか、という点について、主に日本語母語話者と現代日本語の側にある問題点を挙げて検討した。

(3) 現代日本語の先端的な変化の動向を分析するために、江戸時代末期の江戸語を比較対象として、丁寧語の助動詞「です」を採りあげ、研究代表者が独自に開発した江戸時代末期人情本の本文データベースを用いて調査と分析を行った。現代語における「です」(形容動詞・助動詞の活用語尾を含む。以下同じ)は、助動詞「ます」と並び、丁寧語として口語では欠かすことのできない語である。しかし、「ます」が「参らする」などを語源として中世以来の明らかな語史をもつのに比較して、現代語の「です」はその歴史が浅く、現在のように丁寧語としての「です」使用が一般化したのは明治20年代以降であるともいわれている。「ます」に比較すれば、現代語の「です」は、近代になってその使用が一般化した語であるにも関わらず、後述するように「です」の語源には諸説があり、いまだ定説を見ないところがある。しかし、今回の調査と分析によって、現代語の「です」の語源を解明した。丁寧語の助動詞「です」について、江戸時代末期人情本を資料として調査したところ、江戸時代末期の「です」使用では『鶯塚千代迺初聲』初編・二編(松亭金水作、安政3年・1856年刊)の例が最も早い、上層町人の「です」使用が見られる山々亭有人作の『春色恋迺染分解』の初編は、万延元年(1860年)刊であるが、作中にある時事的な記事を検討すると、執筆時期は安政の中頃以降である。従って、安政年間(1845~1860年)には、「です」は上層町人の間でも使用されるようになっていたものと考えられる。現代語の丁寧語「です」の語源は、後期江戸語において「ます」の変化した遊里語の「す」に指定辞「で」が接続して成立したものとあると考えられる。ただし、語形が同一であるため、中世以来の「で

候」または「でえす」を語源とする「です」と遊里語「です」との混淆が一部生じている。遊里語の「です」は、「であります・でございます」よりも待遇価値において下がるが、「ござります」系の「でげす・でござえす」が自卑敬語の性格をもつものに対して、「です」には対者敬語としての性格がある。遊里語として成立した「です」は、遊女のほか、遊廓に出入りする芸妓や、箱回し・幫間・噺家の間においても使用されたが、遅くとも安政年間には一般の上層町人において「です」の使用が拡大しており、これが明治期における「です」使用の普及に直接繋がり、現代語の丁寧語「です」に至ったことが明らかとなった。

(4) 現代日本語の先端的な変化の動向のひとつとして、「接せれる・展開せれる・体感せれる」のような「せれる」という語形でサ行変格活用動詞から抜き言葉が発生していることを早い段階で指摘した。この変化が「接せられる>接せれる」のような変異であるとするならば、「せれる」はサ変動詞から抜き言葉であり、また、「展開せれる>展開せれる」・「体感せれる>体感せれる」の例は助動詞「れる・られる」が接続するサ変動詞の未然形が「さ」から「せ」へと移行している例の一種とみられることを各種のコーパスを用いて検証した。

(5) 現代日本語の先端的な変化の動向のひとつとして、「形容詞 い足す言葉」を採りあげ、日本語教育学の分野との関連から分析と考察を行った。マスメディア上や、日常生活で用いられる東京語の話し言葉の中に、「多いい。」・「美味しいくて、...」・「正しいかった。」のような、規範的な文法を基準としてそこから逸脱した形容詞活用形の変異に「形容詞 い足す言葉」という名称を付して、その使用実態を明らかにするとともに、「形容詞 い足す言葉」が発生した原因と、それが共通語における形容詞活用体系にどのような影響を与える可能性があるか、また、形容詞活用形の変遷の中でどのように位置づけられる可能性があるかなど、その動向について明らかにした。以上の研究結果を「多様性の喪失としての日本語文法史」として総括した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 10
2. 論文標題 ら抜き言葉 せれる の使用実態とその発生原因について 万全を期せれる・笑顔で接せれる・せれるが まま	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『言語の研究』	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 519-7
2. 論文標題 『春秋二季種』初編～第二編（翻刻）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『人文学報』	6. 最初と最後の頁 1-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 8
2. 論文標題 ら抜き言葉と日本語教育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 215
2. 論文標題 日本語の危機的状況について ら抜き言葉・ら入れ言葉・れれる言葉	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 國語國字	6. 最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 517-7
2. 論文標題 春色連理の梅 四編～五編（翻刻）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 1-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 5
2. 論文標題 国会会議録にみられる ら入れ言葉 の使用実態について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 516-7
2. 論文標題 『春色連理の梅』初編～三編（翻刻）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 12
2. 論文標題 形容詞 い不足言葉 の使用実態とその動向について 多いい・美味しいくて・正しいかった	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 63-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 13
2. 論文標題 多様性の喪失としての日本語文法史	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 言語の研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 519-7
2. 論文標題 『春秋二季種』初編～第二編 (翻刻)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 1-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浅川哲也	4. 巻 520-7
2. 論文標題 『春秋二季種』第三編 (翻刻)	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 人文学報	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 形容詞 い足す言葉 の使用実態とその動向について 多いい・美味しいくて・正しいかった
3. 学会等名 日本語学会 2022年度春季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 ら抜き言葉 せれる の使用実態とその発生原因について 万全を期せれる・刺激せれる一品・思い知れせれる
3. 学会等名 日本語学会 2021年度秋季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 日本語の危機的状況について ら抜き言葉・ら入れ言葉・れれる言葉
3. 学会等名 國語問題協議会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 ら抜き言葉と日本語教育
3. 学会等名 東京都立大学言語研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 国会会議録にみられる ら入れ言葉 の使用実態について
3. 学会等名 日本語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 多様性の喪失としての日本語文法史
3. 学会等名 東京都立大学言語研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 浅川哲也
2. 発表標題 語源を異にする二種の「です」とその動向
3. 学会等名 國學院大學国語研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 近代語学会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 592
3. 書名 近代語研究 第23集	

1. 著者名 近代語学会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 530
3. 書名 近代語研究 第22集	

1. 著者名 近代語学会	4. 発行年 2024年
2. 出版社 武蔵野書院	5. 総ページ数 630
3. 書名 近代語研究 第24集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>「ら抜き言葉」が進行した「れ不足言葉」が、明らかに「誤用」だと断言できる理由 https://gendai.ismedia.jp/articles/-/84627</p> <p>ら抜き言葉の氾濫で、言葉の意味が互に通じなくなる？ https://metro-noix.tmu.ac.jp</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------